

<h1>控室</h1>	首都圏大学非常勤講師組合 東京公務公共一般労働組合 大学非常勤講師分会 TEL 080-3310-6910 URL: http://f47.aaa.livedoor.jp/~hijokin/ e-mail: sida@union-kk.com	〒170-0005 東京都豊島区 南大塚 2-33-10 東京労働会館 5F 郵便振替口座 00140-9-157425 大学非常勤講師分会
-------------	--	---

本号の主な内容

◆ 新入組合員の声(3面)

◆ 大学ルネサンス—その29(5面)

労働運動はストーカー行為なのか？ 第2弾!

今、裁判所で起きている、信じられない事態について

川口学園事件の署名運動を展開中

首都圏大学非常勤講師組合委員長 松村比奈子

去る9月8日、首都圏大学非常勤講師組合は、厚生労働省にて記者会見をしました。

この記者会見の目的は、今、裁判所で起こっている、信じられないような事態を多くの人々に伝え、私たちと共にこの問題を考えてもらおうとするものです。具体的には学者を中心に、現在争われている裁判の原告と裁判官に対して、労働運動をまるでストーカーのように扱い、組合活動を差し止めるかのようなこの裁判の異常性を指摘する署名運動を展開中であることを発表しました。

信じられないような事態というのは、労働運動の基本スタイルの一つである街頭演説とチラシ配りが、迷惑行為として裁判所により禁止されたということです。事の発端は、2010年9月、元埼玉女子短期大学准教授であった衣川清子氏の不当な解雇事件について、最高裁判所が棄却の判決を下したことに始まります。

私たちがこれを「お菓子解雇事件」と呼んでいる(学生にお菓子を与えたことが

重大な解雇理由の一つとして認定)ことは皆さんもご存じだろうと思いますが、使用者である学校法人川口学園は、最高裁判決後も私たちが組合行動をあきらめないこと知り、いったんは自ら事務的な解決を申し入れましたが組合が解決案を提示すると拒否するなど、あいまいで不誠実な態度をとってきました。

2011年1月、組合と衣川氏が学園前で5回目の宣伝行動を行った直後、学園は裁判所に対して「組合による団体交渉申入れ禁止」「組合や関係者による学園・短大周辺での宣伝活動禁止」を求める仮処分申立を行いました。しかも、その主張を裁判所はそのまま認めたのです。同年3月、仮処分の決定が裁判所から出され、学園近辺での街宣行動は4月8日まで、学園に対して組合や本人が架電すること(電話をかけること)は無期限に禁止されました。決定は、特に理由を明示する義務はないため、禁止の理由は不明でした。組合側がこれを不服として保全異議申立を行うと、やはり同じ決定が下されまし

た。ここで挙げられていた理由は、衣川氏の裁判が昨年9月に最高裁で棄却され、従業員の地位がなくなったことから、組合が行った団交申し入れや宣伝活動が組合活動としての法的保護を受けないというものでした。しかし、宣伝行動を自粛すると通告したにもかかわらず長期間の禁止をかけたこと、また禁止の範囲も学園や短大の周囲200メートルに及び(JR高田馬場駅が含まれる)、宣伝の種類も問われないなど、禁止範囲が過大であること(たとえば高田馬場駅頭で「派遣法抜本改正を」「奨学金問題の解決を」「学費負担軽減を」と宣伝することも禁止されます)など、れっきとした労働問題であるにもかかわらず、労働法の視点がまったく含まれない不当決定です。同事件は本訴に移行し、現在私たちはこれを「川口学園事件」と呼んでいます。

宣伝行動は、適法かつ穏便に行われていたものです。うち3回は全労連や東京地評(東京地方労働組合評議会)が主催する争議支援総行動のひとつとして、厳格なスケジュールにしたがって25分間行われたもの、1回は短大の最寄り駅であるJR川越線武蔵高萩駅の駅頭でのビラ配りでした。これを業務妨害と主張する学園側の言い分が認められるなら、憲法が保障する表現の自由と労働三権は何のためにあるのでしょうか。

そもそも営業妨害とは、営業の自由という人権を後ろ盾にしている権利ですが、私たちの行動の法的根拠は表現の自由です。憲法学者なら誰でも、「二重の基準論」という判例理論によって、経済的自由権である営業の自由よりも、精神的自由権である表現の自由の方が憲法上の保障を強く受ける人権であることを知っていま

す。もし営業の自由が表現の自由に優先するなら、この社会は、金儲けのために労働者は使用者の奴隷となるべきだといっているのと同じです。本訴において、人権保障を踏みにじる裁判所の判断が下されるような事態はなんとしても避けなければなりません。

そこで私たちは、この問題を広く訴えるために、労働法・憲法・教育法学者を中心に署名運動を始めました。運動を始めて1週間ほどですが、すでに何通もの賛同の返事をいただいております。その反響の速さと量に、当組合でも驚いています。いずれ署名用紙を組合ホームページに掲載し、ダウンロードできるようにする予定です。

記者会見には朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、京都新聞社東京支局、連合通信、共同通信の各社が参加、連合通信が9月10日付の隔日版で記者会見の様子を伝えました。なお、大阪でも建交労大阪府本部の15分間の宣伝カー宣伝に対して会社が仮処分を申し立て、決定が出たという事件(北港観光バス事件)が起こっており、現在保全異議申立がなされ、審理が続いているとのことでした。

繰り返しますが、今、労働者が使用者の不当な対応に異議を申し立てれば、裁判所がいわばストーカー扱いをするという信じがたい事態が起きているのです。戦前の治安維持法の思想が、リニューアル&バージョンアップしつつあることでしょうか。なんとかこの流れを止め、労働者が人間らしく生活し、自由に意見を述べられる社会を実現するために、私たちが闘っている裁判への注目とご支援をぜひ、お願いいたします。

新入組合員の声

非常勤講師組合に加入して

大学の非常勤講師として出講するようになって、振り返ってみればそれなりの歳月が過ぎた。もっとも、今年の3月までは、拘束時間も、給料も他の仕事の分が占める割合が大きかったが。それでも自分の研究を諦めず、様々な人の縁に支えられて、4月から大学で教えることに専念し始めた矢先のことであった。昨年度から勤め始めたX大学から支払われる給料が、私が勤め始める前年度以前に採用された講師の場合、1コマ1回あたり12600円であるのに対し、私、そして今年度採用の講師3人の場合、1コマ1回あたり9000円であることが分かったのだ。この金額は固定されていて、勤続年数や業績等で増額されることもない。

X大学のカリキュラムの特殊性のために、週一回出講だが一人必ず1日3コマ以上の授業を受け持つので、収入の格差は1日1万円以上にもなる。ましてやそれが年間となると、同一労働であるはずなのに30万円前後の格差になる。講師の収入レベルからすると、決して少ない金額である。

私の場合、何も知らずに1年間丸々過ごしていたわけで、それを知った時に何か非常な空しさを覚えた。1年目なので、講義の準備もほぼ毎回ゼロから行っていたわけで、それに費やした時間と労力は決して少なくはない。また自宅から遠方

にあるゆえ、毎週高速バスで出講するので、その中で前の晩準備に追われて足りなかった睡眠を取ることも多かった。実社会で不公正は世の常とはいえ、自分がこのようなあからさまな不公正に直面するとは、恥ずかしながら思っていなかった。そのことが何か迂闊なことのようにも思えた。

この件が分かると同時に、S先生が「この大学は以前も問題を起こして、おとし非常勤講師組合と交渉している。その時に、一回当たり12600円の講義料が文書で規定されている。だから、非常勤講師組合を通して団体交渉を行えば、あなた達の講義料も12600円に回復できる。」とおっしゃってくださった。ただし、団体交渉は当事者の中から最低1人は組合に加入しなければならないとのこと。S先生は以前から組合に加入しており、何回か組合に助けてもらった経験があり、また、組合に加入しているからと言って、後のキャリアに悪影響を及ぼすことはないということを教えてくれた。

正直に言って最初にその話を聞いた時、私自身は組合に入ることに迷いがあった。組合が当てにならないとか、政治的に偏向しているなどとは思わなかったが、何より大学当局の仕返しを恐れた。先輩講師の方々から聴いた前回の交渉にまつわる話などから判断するに、残念ながら大

学当局は専門教育だけが重要だと考えており、教養教育の重要性を全く認識していないどころか、邪魔だと考えていること、邪魔なものに対してはどのようなことも平気とする神経の持ち主だということが分かった。そのような浅薄な考えが高等教育機関としての品位を落としめ、社会へ送り出す卒業生の職業人としての資質を劣ったものとするには、まったく思いが至らないようである。以前の職場の上司がその類の人間だったことと照らし合わせた時、組織全体がそういう精神構造で成り立っている場合に、目障りな個人に対していかなる報復がなされるのか、あまりいい想像はできなかつた。

ただ、そういう精神構造を相手にして黙っていることは、単に都合のいい人間になり下がることでしかない。黙っていて悪くなることはあっても、良くなることはない。都合のいい人間になるということは一見安泰であるが、逆に大学当局の都合で簡単に首を切ってもいい人間だと暗黙のうちに自分で宣言しているようなものではないのか。また、新規採用の講師の給料を低額に抑えることが常態化し、認められてしまえば、ベテランの講師の先生方がこれまでの貢献度や教育力に関係なく仕事を失うことにもなりかねない。つまり全員が当事者であるわけで、そうなれば被害額(?)の一番大きな私が動くべきだと考え、組合に加入し団体交渉を申し込むことにした。

すると、私と共に新規採用の講師の1人が共に組合に加入してくれるという。率直に言って心強い。S先生に教えていただいた連絡先に電話をしてアポイントを取り、非常勤講師組合の本部にうかがうことになった。(S先生には本件につい

て、大小さまざまなアドバイスをその都度いただいた。人生の先輩の励ましがなかったら、泣き寝入りしていたことだろう。)

私達2人(少なくとも私)は緊張して本部に入って行った。まだ執行部が揃っていないということだったので、簡単に挨拶をして、昼ご飯を食べに行った。昼食後に改めて2人で挨拶をし、執行部のみなさんに事情を説明することができた。団交担当のMさんが、前回の交渉も担当されており、その経緯も踏まえて大学当局の余りのでたらめさに心底あきれた様子であったことが印象深い。その日の執行部では、複数の案件について役割分担等が話し合われていた。私達は自分たち以外にも大学側と現に戦っている人がいることを知った。

結局、団交の日取りを決める過程で、「事務手続き上のミス」という理由で、私たちの講師料は12600円に回復されることになった。ただ、講師料以外にも様々な待遇上の問題があり、団交が行われることになった。当日の交渉は執行部にお任せすることにした。また、私達講師の中からも「一言言ってやらないと気が済まない」とのことで、S先生が途中まで参加した。

交渉を経て給料日に明細を確認すると、私の分は去年1年間の未払い分が丸々支払われているのと同時に、基本給の回復が行われていた。他の今年度採用の講師に確認を取ったところ、前月までの差額分と基本給の回復が行われており、ようやく安心することができた。講師料の問題に関して、これほど簡単に、あっさりと決着がつくなんて、最初は思いもよらぬことであった。組合加入を迷っている

段階で、私は個人的に大学の人事課に連絡して問い合わせしてみた。当然と言えば当然だが、講師個人と大学という組織との間に交渉の余地などはなかった。そのことと併せて思うに、憲法で保障された労働者の権利の尊さ、またその権利を実際に生きたものとする組合執行部のみなさんの献身は、本当にありがたい。X大学当局は、別に今回のことで心を入れ替えるわけもなし、また不当な待遇を押し付けようとして来るだろう。その時はまた、団交を申し入れることにしよう。当

事者としてやるべきこと、できることに協力して取り組んでゆこう。

ただ、組合結成からまだ15年ということで、私たちはこの権利を生かす人の力、人のつながりを絶やさぬように支えて行かないといけないだろう。そして、加入者を増やしてもっとこのつながりを大きく育てたいと思う。研究と教育の両立を目指して歩んでいる者であれば、ひるんで泣き寝入りする理由など、何もないのだから。(組合員 T・Y)

大学ルネサンス—その29 TOEIC?

TOEIC Today

‘towik’ refers to TOEIC, the anagram of Test of English (for) International Communication. This test is given in more than 90 countries to over 500 million people annually to evaluate non-native speakers’ communication ability in English, and over the last 32 years more than 165 different TOEICs have been held, according to International Business Communication Council(国際ビジネスコミュニケーション協会) which is the organization in Japan with responsibility for administering and promoting TOEIC. So its reputation as a valid measurement of communicative competence in English as a foreign language has been secured across the world and through time. Yet few educators in Japan seem to understand exactly what TOEIC is. Indeed, until 2007 When two authentic practice tests were published by IBCC, the only way to research TOEIC directly was to take an actual TOEIC(unless a person was fortunate enough to have gotten any copies of the first, second, or third TOEIC, which were made available).

TOEIC Origin

TOEIC was conceived by Kitaoka Yasuo(北岡靖男), a Japanese, who contracted

its making to the English Testing Service(ETS) associated with Princeton University in New Jersey, USA. ETS is well-known as the deviser and administrator of TOEFL, Test of English (as a) Foreign Language, which American colleges and universities use as reference to judge how much the academic performance of prospective students from foreign countries could be influenced by their competence in English. For ETS, the envisioned TOEFL examinee would be a non-native English-speaker and foreign national who aspired to study at an educational institution in the United States. Accordingly, both the contents and contexts of the TOEFL test reflect the language, topics, situations and environments that such a student could encounter both inside and outside the classroom while on campus. The scope of the recorded and written materials which make up TOEFL therefore exclude matters of ordinary daily life or personal interests and activities. A more accurate title would have been Test of English (as a) Foreign Language (for) International Students, which abbreviates to TOEFLIS.

Originally, ETS seems to have designed TOEIC in a similar fashion to TOEFL with respect to the contents and contexts of the recorded and written materials presented within it. However, the envisioned TOEIC examinee seems to have been a non-native speaker of English and a resident of Japan who was either a prospective or likely candidate for assignment and employment in the USA. This is suggested by IBCC being solely responsible for ordering and administering TOEIC for the first 16 years of its operation, by TOEIC being given only in Japan in the initial period of operation, by the frequent use in tests of Japanese and “Japanese-sounding” proper names in the first period of TOEIC operation, and by the exclusive use of American speakers of English on the recorded sections until 2005.

In addition, both the contents and contexts of the TOEIC test prior to 2007 reflect the language, topics, situations and environment that such an employee of a Japanese company could encounter both inside and outside the workplace while on assignment in the USA. Like TOEFL, the initial scope of the recorded and written materials which make up TOEIC exclude materials relating to daily personal lifestyles and interests that are usually covered and practiced in English communication classes. So the title Test of English (for) International Communication would more accurately state its aims and content if it had been lengthened to Test of English (for) International Communication (by) Japanese Employees.

Of course doing so would have also led to a less elegant anagram of “TOEICJE”. Be that as it may, Kitaoka went ahead and called the new test “Test of English

for International Communication”, and—as was the case with TOEFL—the five letter anagram of ‘TOEIC’ was officially registered. Thus, TOEIC would be registered as being distinct from TOEFL in the last two letters while having affinity to it in the first three letters and the whole representing more than the test actually was meant to be.

TOEIC: Miss-labeling?

In Japan internationalization has been for most people a synonym for mastery of English. A “kokusaijin”(国際人) was not a person who had extensive experience abroad and deep understanding of other cultures or countries but was a Japanese person who could speak to non-Japanese—particularly Americans—in English. As such, potential examinees of the TOEIC could implicitly understand the title to mean “Test of English for Japanese Communication with (mainly) Americans”. Kitaoka didn’t really need to make any explicit reference to Japanese employees in the title because of this subjective assumption. Furthermore, since only Japanese were probably likely to take TOEIC, the inclusion of International probably didn’t seem an overstatement at all from this subjective viewpoint of a Japanese person interested in TOEIC for professional reasons.

However, some individuals and organizations would subsequently have had reservations concerning the validity of TOEIC as an accurate measure of communication ability in English because TOEIC only contained two sections: listening and reading. It does not test speaking and writing ability. (The TOEFL has long had separate speaking and writing tests in addition to the combined listening and reading standard test. Moreover, the new internet TOEFL test combines all four of communication skills in one package). Normally, communication involves listening and speaking ‘sound’ skills as well as reading and writing ‘graphic’ skills. Yet TOEIC was a test which only involves the comprehension skills of listening and reading to the exclusion of the performance skills in speaking and writing. Therefore, the use of “Communication” in the title was also a misrepresentation of the format in TOEIC and the skills that were directly assessed through it .

The title, Test of English for International Communication, omits both the original test target (Japanese employee) and the subject matter (working assignment in the USA), includes International as an exaggeration from an objective viewpoint, though not from the ethnocentric subjective viewpoint of a Japanese person, and contains the word Communication without any additional qualification of its scope in that only comprehension skills were tested. In short

the title seemed to be a misrepresentation of what TOEIC directly assessed. A further complication in the use of both international and communication is that they are used as a collocation in the phrase “for International Communication”. The preposition for has several functions but in this instance it clearly indicates ‘purpose’. Therefore, the phrase International Communication is clearly marked as the function of the English in the test. An accurate paraphrase would be Test of English for the purpose of International Communication. Confusingly, International Communication is an objective field of research closely related to Inter-cultural Communication.

Notwithstanding the subjective Japanese understanding of the phrase as speaking English to native speakers of that language, in International Communication the objective is to study communication both at the macro and micro level between different countries, nationalities, and identities in a cross-cultural context with the aim of ①discovering how such communication succeeds or breaks down and ②offering solutions for attaining the former while avoiding the latter. International Communication does not just study language; it tries to reveal the values, beliefs, behaviours, and sensitivities that promote and evoke language use to increase mutual awareness and decrease misunderstanding so that relationships can be built, maintained, and improved between countries, organizations, and individuals with different nationalities and cultures. The basic notion of this research is that merely knowing a language is not enough for good communication in an international relationship. So, speaking or understanding English well does not necessarily mean communicating well either for non-native speakers generally or native speakers occasionally in an international setting. Therefore, Kitaoka’s adaptation of the phrase “for International Communication” both to describe his new test and to attract Japanese employees and employers to it was a misnomer at best, a fabrication at worst for anyone familiar with the field of International/Intercultural Communication. Also for educators concerned with TOEIC as a valid test of ability, the title would even seem an instance of mislabeling could they research and investigate the actual content of a TOEIC.

TOEIC: Bad English!

The title of Kitaoka’s innovative test has been characterized as both vague (assessment of comprehension but not performance skills) and ambiguous (particular contents and contexts relating to interactions in the USA but not intercultural approaches or problems affecting interactions). Undoubtedly,

Kitaoka had no intent to deceive anyone interested in the test, but for professional and well-informed non-Japanese the title “Test of English for International Communication” would be confusing at least and obscure at most unless they had access to promotional materials for the test (in Japanese).

The International Business Communication Council which Kitaoka set up in Japan to order, promote, administer, and assess TOEIC has made no secret of the actual types of questions on the test. Nearly all of their promotional and application materials have outlined both the Listening and Reading Sections which made up a TOEIC, and any changes that were to occur in them. The Listening Sections has always consisted of four parts: Picture Description, Question or Comment/Responses, Conversations, and Presentations. The Reading Section has always consisted of three parts: Sentence Completion, Sentence Correction (replaced by Paragraph Completion in 2006) and Text Comprehension.

In the Listening Section examinees have been required to understand recorded statements and then select the one that best describes the scene presented in a photograph in Part 1, to understand a recorded question or comment and then choose the most appropriate response to this from three recorded choices in Part 2, to understand a recorded dialogue between two people, who take alternate turns in speaking (usually twice), then read questions concerning the dialogue and choose answers from four written choices in Part 3, and to understand a recorded talk or presentation, then read questions concerning the content of this and choose the answers to these from four written choices in Part 4. This Listening Section tests examinees understanding of descriptive statements in Part 1, interrogative and exclamatory statements and their appropriate responses in Part 2, short conversations about a particular topic in Part 3, and solo presentations on a particular topic in Part 4. In short the listening Section tests examinees comprehension of four different types of recorded communications.

In the Reading Section examinees were required to understand which word of four choices would be most appropriate to complete a sentence in Part 5, to understand which word of four choices was not appropriately used in sentence in Part 6, and to understand the content of various written texts such as letters, faxes, e-mails, memos, notices, articles, and forms before reading questions concerning these and selecting answers from four written choices in Part 6. The Reading Section, therefore, tested examinees' understanding of appropriate and inappropriate use of a word within a particular sentence through Part 5 and 6, and their understanding of the content of longer texts of various kinds in Part 7:

it focuses on both the content and context of written communication within a particular sentence and a particular text. The Reading Section has tested comprehension in the meaning and function of language items within particular types of written communication ranging from forms through sentences to longer texts of various purposes. In summary, the TOEIC assesses comprehension of English in varied and various communications, both recorded and written.

After analyzing the actual TOEIC format and the different parts it would seem that “Test of English for International Communication” is actually a misrepresentation of “Test of English in International Communications”. The difference in the function of for indicating purpose is sometimes not so obvious from in indicating means, for example the phrase fish market may be paraphrased as market for fish or market in fish. However, in other cases the logical difference between the function of for and that of in is clear such as car space which could ambiguously mean space for the car or space in the car. whether Kitaoka was aware of these features of logic, function, and usage is not known. However it is fair to say that the title of “Test of English (for) International Communication” does not match the composition of the test or accurately summarize it.

In conclusion the apparent subjectiveness of the title Test of English for International Communication not only obscured what the test actually was but also confused understanding of that with an objective field of study and even employed bad grammar in doing so. TOEIC is just not plain English.(馬利平太 2011/9/11)

クリップボード

(1) 『控室』原稿を募集します

組合員であるか否かを問わず随時原稿を受けつけています。掲載段階での匿名はかまいませんが、連絡先は明記してください。原稿は題字横のメールアドレスまでお送りください。短い記事や通信は送信者に断りなく、匿名で掲載する場合があります。

(2) 『控室』を配布して下さる方を探しています

勤務先のメールボックスなどに『控室』を配布して下さる方を探しています。

お志のおありの方はぜひ組合本部までご連絡ください。講師控室に直送も可。

【編集後記】 川口学園事件裁判、多数の組合員が傍聴につめかけました。日頃、顔を会わせることの少ない私たちですが、要所要所に結集する組合員を心強く感じます／平太さんの TOEIC 論、いかがでしたでしょうか。雇い止めの口実にも使われる TOEIC、こういうものだったのかと英語教師ならぬ私は、今さらながら知りました。ご意見・ご感想をお待ちしております(行)

